



みちくさ～遊びがもたらす可能性～

なぎさ公園小学校
教諭 岩崎 喬

子どもをとりまく環境の変化

「“サンマ”がなくなった」こんな言葉を耳にしたことがないだろうか。“サンマ”…文字で表すと、「時間」「空間」「仲間」の三つの間のことを言うのだが、確かに今の子どもたちに放課後の過ごし方を聞くと、学習塾、ピアノ、お習字といった答えが返ってくる。子どもたちの放課後は習い事でスケジュール化されてしまっているのである。また、習い事をしていない子どもにも、家の近くに自然を感じながら思い切り体を動かせる場所はあるだろうか。また、この「時間」と「空間」を持った子どもがいたとしても、いっしょに遊ぶことのできる「仲間」に出会えているだろうか。間違いなく、子どもをとりまく環境に“サンマ”がなくなっている。昔の子どもたちは、学校から帰ると地域でかくれんぼ、鬼ごっこ、木登りなど様々な遊びをしていた。年齢や性別の違った仲間と自分たちだけの世



界を持っていた。そこでの実体験の中で、喜びやくやしさを積み重ねていた。ところが今の子どもたちは、家の中でテレビ、テレビゲーム、インターネットなどのバーチャル世界(仮想現実空間)に身を浸してしまっている。バーチャル世界では、喜びやくやしさを感じると、すぐにリセットすることができ、その重みを感じることは少ない。なんとも不幸な時代を子どもたちが生きていると言わざるを得ない。

学校でできること

子どもたちをとりまく環境を悲観し続けているだけでは、何も始まらない。学校の中で何かできることがあるはず…という思いから「みちくさ」はスタートした。幸い、わたしたちの学校には広い芝生のグラウンドがある。メダカやヤゴの住むビオトープがある。校外には、みずりの浜公園、八幡川河口の干潟、海老山といった自然環境がある。それらを活かし、今の子どもたちが失ってしまった野遊びの機会を与えることができる。地域でできないのなら学校で…、放課後でできないのなら授業の中で…。



授業名「みちくさ」

この何とも風変わりな授業は、低学年(1・2年)で展開される。この中では、子どもたちは思い切り遊べる。学童期の最も多感な時期の「やってみよう」という自然な衝動をそのまま行動に移し、感性を育みたい。意図する何かをいかに教えるといった指導意識を前面に押し出さず、時間・場所・用具を設定し、その中において子どもたちの持つ能力・興味・自主性に基づく活動を存分にさせていく。

例えば、4、5月には公園に咲いている草花をつなげて遊んだり、引っ張りずもうをしたり、身近にあるものから遊びを発見する。

6、7月には、竹馬・竹ぼっくり・竹とんぼなど、今までやったことがない伝承遊びに取り組み、出来ないことのくやしさを、出来たときの喜びを味わう。

9月には敬老の日に合わせて、地域の遊びの先輩(おじいちゃん、おばあちゃん)に、お手玉・こま回し・けん玉などを教えてもらう。

寒くなってくると、いろんな相撲(ケンケン相撲・しり相撲・押し相撲など)で体と体をぶつからせて汗をかきほくほく熱く燃え上がる。



年が明けると、いろんなお正月遊びに夢中になる。風揚げでは、去年コツを掴んだ2年生が、1年生に手取り足取り教えてみるが、教えるのはなかなか難しいようだ。羽子板では、墨の代わりにシールを顔に貼り付けて、失敗することも楽しむ。巨大絵札を使ったカルタ大会では、自然と応援団や子どもたちなりの作戦会議が生まれた。

このように1年を通じて、子どもたちにしなやかな創造性、判断力、協調性、社会性、自主性が育まれていく。これが「みちくさ」の授業である。

よく遊びよく学べ

小学校に入ると、机について授業を受けるという生活が始まる。それまで幼稚園や保育園である程度自由に行動することが許されていた子どもたちが、自らをコントロールする環境に置かれる。子どもたちは私たちが想像する以上に大きなストレスを持って校生活をスタートさせているのだろう。



また、遊びの中から育つ力は、今も昔もさほど変わらない。よく遊ぶという実体験の中から、生きるために必要な学びをしていく。

「みちくさ」が低学年のための授業であることには意味がある。この時期に培われた子どもたちの遊び=学びはその後の小学校生活はもちろんのこと、以降の生活に大きく影響を与えていくに違いない。

そして「生きる」力の土台となることを私たちは信じている。

低学年の子どもたちの学校生活に「みちくさ」の授業は微力ながら手助けをしている。思いきり遊んで教室に帰ってきた子どもたちは実に集中して机に向かう。よく遊んだ後はよく学ぶというメリハリが、つけられている。

